
Time Legend

荅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Time Legend

【Nコード】

N0308A

【作者名】

蒼

【あらすじ】

同じ音楽高校に通う全く関係の無い五人の少女が、些細な出会いをきっかけに、ある意味とんでもない事に巻き込まれてしまう。埃をかぶっていた真白の本に、一つの物語がようやく書かれていく。

ブローグ

埃をかぶった真白の本

ある私立の音楽高校

物語の始まりは、と

そこには声楽からミュージカルまで

りとあらゆる科が設けられていた

あ

その中で特に目立つ、それぞれ科の違う五人の少女

一人目は良家出身で小鳥の様

に澄んだ歌声を持つお嬢様

二人目は気性の荒い男勝りの元気なチエ口弾き娘

かな音を出す秀才のフルート吹き

三人目は踊り子の如く軽や

四人目は抜群の運動神経とリズム感を操る華麗なダンサー

は絶対音感を巧みに扱い剣術にも長けているサックス奏者

五人目

……この少女達の出会いが、

つ
た
…

こ
の
後
起
こ
る
事
の
引
き
金
だ

プロローグ

埃をかぶった真白の本（後書き）

…さて。

またまた小説を思いついちゃったので

眠らせる訳にはいかず書く事にしました。

今回の話のジャンルはどういう物なんだろうかね。

少なくとも二つほど入りそうなので、

ほんの少々悩んだ結果『その他』になりました。

前置きはこれぐらいにして。

少女達の名前は次回から出て来ます。

…お預けの少女もいますが（笑）

これから頑張りますので、

皆様 お暇な時にお付き合い下さい。

No.1 Encounter

私立豊島音楽高等学校。この学校の科は、声楽からミュージカル、果てはバレエに作曲科まで設けられた私立の音楽専門校だ。

その校内では、現在四人の女生徒がそれぞれ有名である。

一人目は、荻原財閥の一人娘で澄んだ歌声を持つお嬢様、
荻原 愛架。おぎわら あいか 彼女は入学してから

二年の間に、沢山のコンクールに個人で出場し、総数十の賞を受賞した声楽界の若きホープだ。

二人目はその気性の荒さや男勝りな所から、周囲の人間に
恐れられている金沢 勇揮。かねざわ ゆうき だが、

その性格とは裏腹に、チエロの腕はピカイチで、一部の先輩、後輩からは何故か『勇さん』と言われ慕われている。

三人目は、控えめな仕草に眼鏡がよく似合い、この高校
きつての秀才、天谷 希美。あまが い のぞみ 彼女が

吹くフルートはまるで踊り子のように軽やかな音を奏で、
周囲の人間を魅了する力がある。

四人目は抜群のリズム感を上手く操り、歌や踊りに演技、
どれも笑顔で見事にこなす祠堂 嘸喜。じゅうしやう ぽき

瞬間記憶の特技を持ち、誰よりも早く物事を覚え、教諭
からも生徒からも信頼されている。

この四人はお互い噂でしか聞いた事がない。会った事もないのだ。けれど、胸の奥ではお互い一度会ってみたいとも思っていた。

ある日、囃喜は同じミュージカル科の友人である美加と一緒にシヨッピングに出かけた。

あちこちを歩いている内に、二人はとある路上店に目を止めた。

「あ、ねえねえ囃喜。あの古いの何だろ？」

美加の指の先には、少し古いペンダントが掛かっていた。

あれ…？

囃喜は、惹きつけられる様にペンダントを見つめた。

「そのペンダントが気に入ったかい？」

そんな囃喜達に、路上店の人間が声をかけた。

「それは懐中時計だよ。今時作られる懐中時計は高いが、

この時計はアンティークもあつて、結構安いぞ」

確かに店の人の言う通り、他の店で見える値段よりも数倍安い。だがそれ以前に、囃喜はその時計に惹かれていた。

「…これ買っわ」

「えっ？囃喜、買っの？これ。私は薦められないなあ…」

美加は少々顔をしかめて言った。どうやら彼女にとって懐中時計は古いという観点らしい。

「…私も分からないんだけど、何か気に入っちゃってね。はい、これ」

囃喜はお金を払うと、懐中時計のペンダントを受け取った。

「…じゃ、行こっか」

「あ、そうそう！」

二人が店から離れようとすると、店の人が二人を呼び止め、

「その時計、色違いの物があるんですけど、三つ以上は絶対に揃えないで下さいね。危ないですから」

などという意味深で不安にさせる事を口走った。

「何それえ…変な事言わないでよ」

美加は気味が悪そうに店の人を見ながら言い、囁喜は訝しげに時計を見ていた。

翌日。囁喜は早速ペンダントを着けて学校に向かった。

豊島音校は羨ましい事に、風紀に関しての校則はとても緩い。まあ、それは厳しくする必要がないからだが、さすがにピアスホールまで空けてはならないので、派手ではないイヤリング、ネックレスもしくはペンダント、ブレスレット等どれか一つのみならば着けてもいらいしい。勿論授業中は外すのだが。

ただ、勇揮の場合ピアスを左耳に二つ着け、更にブレスレットも着けているため、教師陣に目をつけられている。

「おはよ　！　って…囁喜それ着けて来たの？　懐中時計なんてやめなよお　」

美加は挨拶している間に囁喜の首に掛かっているそれを見て眉間にしわを寄せた。やはり彼女は気に入らない様である。

「ま　ま　、そう毛嫌いしないで。この時計、鏡もついてて結構使えるんだから」

二人はそんな風に言い合いながら、体操着に着替えるために更衣室へ向かった。

「は　いじゃ今日は踊りの方を通してみるからね、個人で柔軟体操しといてね。勿論、お喋りは厳禁！　私はちよつと職員室に用があるから」

と言うと、教師は体操室を出て行った。

各々準備を始めている中、囁喜はあの店の人の言葉が頭に

引っ掛かっていた。

「（何なの…？ “三つ以上絶対に揃えたらいけない”とか

“危ないですから”だとか…。あの人どうしてそんな事を…？）
珍しく進んでいない様子の囁喜に、クラスの人々は心配そうに見ていた。

「ごめんね？ ちょっと用事に手間取っちゃって…じゃあ始めるわよ！
最初のフォーメーション見せて！」

教師がそう言うと同時に囁喜は物思いに耽るのをやめ、生徒達は初期の立ち位置に板付いた。

「緞帳が上がったらすぐに音楽掛かるわよ！ はいスタート！！」
教師が手を叩くと同時にジャン！ というイントロが入り、生徒達の顔が

一瞬で変わると、それぞれの位置に散らばって踊り始めた。

「ほら！ そこもうちよつと離れて！ 実咲、知子！ 貴方達は離れ過ぎ！
もう少し詰めて！！ 綾香、もつと前に出て振付大きく！！」

教師は大声で生徒達に言う。
そんな中でも囁喜はしっかりと、更に笑顔をプラスして踊っていた。

「さあ そろそろ見せ場よ！ 皆フォーメーションしっかりね！！」
教師の合図に従って、生徒達は二人一組のペアになって円を形取ると、

片方がもう片方の膝を足場にして外側に向かって一回転を繰り返した。

「千佳、真由美！ 回転するタイミングがちょっと早すぎるわよ！
もっとしっかりと音楽聴いてタイミング合わせて！！」

やはり教師の声が飛ぶ中、一時限目は終了した。

「あ 疲れたあ。あつ！ねえねえ囃喜、これから自由でしょ？校内なら

教室出てもいいみたいだから、これから本館に行ってみない？」
更衣室を出た囃喜を美加が呼び止めて言った。

この高校は五つの館に分かれている。北館には弦楽器科、南館には鍵盤科がある。声楽コースはこの鍵盤科に含まれている。西館に管楽器科、

東館に打楽器科やミュージカルコースがあり、本館とは渡り廊下で繋がっている。その為、各館の通り道になっている本館は各科の公共の場やふれ合いの場となっている。

「……本館？」

「そ！囃喜、あそこまともに行った事ないでしょ？明日から本番に向けて

強化期間に入るんだから、しばらくあそこ行けないのよ？だから、今日の自由時間くらい違う科の誰かと話してみたら？」

「…分かった。じゃあ行ってみようか」

美加の強い押しに、囃喜は苦笑しながらも頷いた。

この時の判断が、後に信じられない事を起こす引き金になるうとは、

一体誰が考えようか……

「さて……と（どうしようかな…）」

自習時間になり、取り敢えず同じクラスの由貴と梨那、美加と

一緒に本館の多目的広場に来たのはいいものの、一体誰と話せばいいのか分らない。そして何より……

「……キヤ　　ッ！！祠堂先輩よお　　っ！！！！」

という甲高くて黄色い声がうるさくてならない。

「そうだった！ 囃喜ってば全校生徒の間で有名なのよね」

囃喜の横で美加が溜め息をつく。由貴が「まあまあ」と宥めている中、

今度は北館側から黄色い声が響いて来た。

人ごみで前が見えない為、身長が182cmもある梨那に見て貰うと、

「あ　　っ！！あれ……！弦楽器科チェロコースで有名な……」

あの金沢　勇揮さんじゃん！！」

少々甲高い声で言う梨那に三人は、特に囃喜は驚いた。

実を言うと、囃喜は自分以外に有名な生徒に会った事がなかった。

表には出そうとしないが、正直言ってその人達と会って話をしてみたかったのである。

囃喜が言い出そうとすると、次は西館から黄色い声があがった。

人ごみで見えないのだが、周りの生徒達の叫び声から察するに、どうやらあの秀才、天谷　希美が来たらしい。更には南館からも声楽界のホープ、荻原　愛架も本館に来る様だ。

つまり、この本館に東西南北各館の有名人が揃う事になるのだ。

囃喜はこの事を聞いても未だ信じられずにいた。長い事思っていた事がたつた今現実となるのだ。まるで夢の様である。

そんな様子だったため、囃喜は胸につけていたペンダントがうつすらと光り始めていた事に、全く気が付いていなかった。

最後に愛架が本館の多目的広場に足を踏み入れた途端、四人のペンダントにブレスレット、ネックレスそしてポケットの中が強く光り始めた。真っ白な眩しい光が広場を包み込んでいく。

「なんだ！！？」

「時計が……！！！」

「熱…っ!!」

そんな声が聞こえる中、囁喜は光の中で店の人の警告を思い出した。

その時計、色違いの物があるんですけど、

三つ以上は絶対に揃えないで下さいね

「まさか…あの店の人が言ってた危ない事って……っ!!」

その叫び声さえも周りの喧騒に飲み込まれてしまい、場内は完全に光に満たされ、愛架と勇揮、希美に囁喜はあまりの眩しさに目を瞑った。

しばらくして、急にふっと床の感覚がなくなったと思うと、

急に落下し始め、不思議に思った四人は目を開けて驚いた。

「…ここ学校の筈だろお !!?!」

勇揮は大声で叫んだ。

既にそこは豊島音楽高等学校の多目的広場ではなく、それぞれの雲の上に城や山々が立ち並んでいる、何とも不思議な光景だった。

「それより!!まだ下へ落ちてますわよお っ!!」

愛架が青い顔でヒステリックに叫んでいる間も、落下は留まる事がない。

「…まずいですよ……このままだと私達、確実に背中に翼が生えま
すよ」

「こんな時にどうしたらそんなに冷静でいられるのよお っっ!
!!」

四人は悲鳴をあげながら、どんどん下へ下へと落ちて行つた。

No.1 Encounter (後書き)

…もし続きを待っていた方がいたなら謝ります。

二ヶ月もかかってしまつて本当にごめんなさい!!!

二学期が始まつてからというもの、なかなか時間が取れなくて執筆出来なかつたんですっ!!

文化祭が近くなつて、余計に部活との両立が…」

…謝罪はこれくらいにして。

少女達の名前、やっと出て来ましたね。

五人目の少女の登場は、まだまだ先になります。

因みに。話の最中で「これ違うんじゃないの?」とか

疑問を持った方ももしかしたらいるかも知れませんが、

これはあくまで答の想像から来てますので、

その辺はご了承くださいね。

次回は四人が一体どうなったのか、そして

あの懐中時計の謎が明らかになります。そして、

しばらくはこの四人の少女達のストーリーを

楽しんで下さい。

No.2 Origin

勢いよく落ちていた四人は、地上10m辺りで急にそれぞれの懐中時計が光り出したのに気付いた。

「光ってる……………」

「さっきほどじゃね けど……………」

光はゆっくりと広がり、それと共に四人の身体も浮いていく。

「…浮いてる…？」

「まるで夢を見てみたいですわ……………」

「……………凄い…どんな原理で浮遊してるの？」

こんな時でも希美は必死に仕組みを突き止めようと頭を働かせる。そうこうしている内に、足元に地上が見えた。四人が足をつけると、懐中時計の光はゆっくりと消えていった。

「消えましたわね…一体何だったのでしょうか……………」

「んな事より、もっと重要な事があるだろ」

愛架がネックレスに着けている懐中時計を弄りながら言っていると、割り込む様に勇揮の透き通った低めの声が聞こえた。

四人の目の前には、空に浮かぶ山や城、泉が見える世界が広がっている。

「…ここ……………どこですか…？」

「少なくとも学校じゃねえ事は確かだよな」

希美が少々怯えた様子で辺りを見回し、勇揮はイラついた感じで前髪をかきあげる。

「恐らく日本でもありませんわね。こんな光景は日本では見る事さえ出来ませんもの」

「うつん…多分……………私達が知ってる世界でもないと思うわ…だって、山や城が浮かんでるなんて事、私達の世界じゃありえないし……………」

考えながら言う愛架の言葉を囁喜が否定する。

「……じゃあ、ここ一体どこなんだよ？」

かきあげた髪をクシャクシャと弄りながら、勇揮が囁喜に問う。
囁喜は少し言いにくそうにしながらもはつきりと言った。

「……異世界に連れて来られたんじゃないか、って……」

「そんな！ありえないですよそんなお伽話の様な事……！」

「でも、実際に私達はこの光景を目の当たりにしてるわけですから……」

信じられないといった表情で言う希美に、愛架は辺りを見回して返す。

ぐつと詰まる希美に、愛架が笑顔で言った。

「まあまあ。私達が今どこにいるのかも分かった事ですし、それぞれ自己紹介でも致しません？」

のほほんと言う彼女に、少し不安になって来る三人だった。

愛架は右手を胸に置くと、綺麗な笑顔を浮かべて言った。

「では、私から。私は鍵盤科声楽コースの荻原 愛架と

申します。十六歳の高校二年生ですわ」

「……ちよつとまで、荻原って……まさかあの声楽界のホープか!？」

「はい。恥ずかしながら、そう呼ばれてますわ」

勇揮の驚いた様な言い方に愛架は笑顔で頷いた。三人は顔を見合わせた。

「……まあいいや。次は俺な。俺は弦楽器科でチェロコースの

金沢 勇揮だ！因みに十七歳の高二だぜ」

少々雑な自己紹介に、今度は希美が聞いた。

「え……金沢 勇揮さんって……『勇さん』と言われ慕われているあの金沢さんですか……!？」

「ああ、そっぴゃあそんな風に呼ばれたりするっけな」

動揺している様子で聞く希美に、勇揮はニヤリと笑みを浮かべて言う。

声楽界のホープに不良のチェロ弾き。こんな豪華な顔が揃っているとは。

「では、次は私ですね」

希美はゆつくりと立ち上がり、一礼して自己紹介を始めた。

「私は、管楽器科のフルートコースを選考している天谷 希美といいます。」

十六歳の高校二年です。 ……因みに、皆さんからは何故かは

知りませんが、秀才のフルート吹きと呼ばれています……」

少し頬を赤くして言う希美に、愛架達はまたもや目を丸くした。

「貴方があの希美さんですね……お会い出来て嬉しいですわ」
愛架は綺麗な笑みを浮かべながら言った。

「さて、と……最後は私ね」

囃喜はそう言うのと、地を蹴ってくるりと後方に一回転をすると、見事に着地した。

「私はミュージカルコースに所属してる祠堂 囃喜よ！因みに十七歳の高校二年！よろしくね」

満面の笑顔で言う囃喜に、勇揮は目を輝かせた。

「お前が祠堂か！いや 会ってみたかったんだよなあ……！」

二人は握手しながら楽しそうに話す。その横では愛架と希美が何やらとても難しい話を繰り出している。

そんな様子の四人の上空から、

「お主達は一体いつまでじゃれておれば気が済むのじゃ」

という怒気が含まれた声が響いて来た。

四人は弾いた様に上を向いて見回す。勇揮は崖の上に人影を見つけた。

「テメ 誰だよ……！」

彼女の叫び声に答える様に、影は数十メートルほど上空にある崖から勢いよく飛び降りて来た。

「……お主達が異世界に『転生』されたという伝説の戦士か」

四人にそう言ったのは、自分達よりかなり身長が低く、妙な格好を

して、

いかにも重そうな杖を持った少女だった。

「何だよその偉そうな態度は！！テメエ　どっからどう見たって俺より年下だろ！？」

勇揮が額と手の甲に怒りの象徴を浮かべ少女に指をさす。

（　良い子は指差さないでね。：作者談）

すると、少女は左手に持っていた杖を勇気の頭に思い切り振り下ろした。

「何を失礼な事を抜かすか！我はこう見えて528歳じゃ。10の頃から

背の成長などとうに止まっておるわ」

「何いいい！！？」「ええええええええ！！！！？」

三人は驚きの声をあげた。

「まあ…かなりお若く見えますわね。とても528歳とは思えませんわ」

こんな時までも、愛架はのほほんと言う。

「『若い』で納得出来る限界を軽く超えていますよ、528だなんて

……110歳でも

驚きなのに……」

希美は座り込み、頭を抱えてうーんと唸っている。

「……お主達よ、じゃれ合いはここまでじゃ」

少し低い声に変わり、不思議なオーラを纏う少女に、四人は思わず圧倒されかけた。少女は続けた。

「お主達をこの世界へ呼び出したのは誰か分からぬ。しかし、じゃ。

…今、お主達や我ら、沢山の世界に大きな『ヒビ』が入っておるのじゃ。

それらの世界が危ういのは変わらぬ」

少し俯く少女に、囃喜は何かひっかかりを憶えて言った。

「…世界に『ヒビ』？」

囃喜の言葉に少女は深く頷いた。

「この世にはお主達の世界の他に数多の世界が存在する。もちろん、普段は互いの世界に影響されず干渉されぬ様に、世界と世界の間は高度な魔法や呪術の壁が立ち塞がっている。……じゃが、どうやらこの頃、その幾つもの世界の間にある筈の壁が消えている。」

そのせいで、互いが互いの世界に影響を及ぼし、世界自体に『ヒビ』が

入ってしまうておるのじゃ」

一しきり言つと、少女は深い溜め息をついた。

「世界に『ヒビ』…つまり『傷』が入っているのは分かりましたが、それが

私達と一体どういう関係があるのですか？」

分からないといった様子で希美が聞く。この様子では、彼女の頭で考えても

答えを出せなかったらしい。

「……お主達の話は三百年前に遡るのじゃ」

そう言つと、少女は杖を構えた。すると、杖の中から勢いよく分厚い本が

飛び出して来る。

「うおっ！？おい！危ね だろがよ！！！」

「お主ほどの優れた反射能力があれば楽に避けられるであろう」

思わずぶつかりそうになった分厚い本をしっかりと受け止めた勇揮は不平を言つたが、すぐ少女に返されてしまい返答に詰まっていた。

「その本はこの世界に語り継がれてきた伝説を細かく記した古文書じゃ。」

自分達の事は旅の道中でも読んで知るが良い」

少女の勝手な言動に、一瞬四人は自分達の耳を疑った。

「ちよ、ちよっと待って下さいませんか？貴方、今何と仰いました…？」

愛架の言葉に、囁喜達は空耳であつて欲しいと願った。

だが、その願いは脆くも崩れ去る事となった。

「おお…言い忘れておったの。お主達にはこの世界や他の世界に入った『ヒビ』を消し去る旅をして貰いたい」

軽く言う少女に、勇揮は掴みかかった。止めようとする希美の手を振り払い、

「てめえ！！何勝手にごちゃごちゃ言っただよ！！『旅』だお！？」

ふざけんじゃねえ！！こちら毎日忙しいんだよ！！！！」

と少女に怒鳴りつける。三人は必死に二人を引き離そうとする。

だが、少女は何の反応もなく、ただ勇揮の額に人差し指をそつと当て、

ブツブツと何か呟いただけだった。

しかし、次の瞬間に三人は驚きのあまりその場に立ち尽くしてしまふ。

少女が指を離すと、勇揮は瞬く間に石像と化してしまったのだから。

「金沢さん！？」

希美は石となった勇揮を叩いたり揺すったりするが、勇揮の石化が解ける

様子は見られない。

「案ずるでない、仕置きをただけじゃ。ちゃんと生きておるわ。

尤も、身動きだけは取れんがの」

少女は乱れた服を直しながら言った。そして三人に向き直ると、

「手荒な真似をしたのは謝る。しかし、お主達が務めなければ世界は破滅への道を歩むばかりじゃ……頼む」

頭を下げて言う少女に、囁喜は頭を上げさせると、

「……分かった。何だか知らないけど、私達がいる世界も危ないんでしょ？」

やってみる」

「私もやりますわ。どの世界にも危険が迫っていて、それを防ぐのが私達しか

出来ない事でしたら、答えは決まっていますもの」

「そうですね。私達が出来る限り、やらせて頂きます。ただ……」

「ここまで言っと、希美は俯いてしまった。少女は顔を覗き込み、……ノゾミ、と言ったかの。遠慮せずとも話してみるがいい」と微笑した。その可愛らしい笑顔に希美はつられる様に言った。

「……私達は高校生です。昼間は授業があって抜ける事は出来ません。授業が終わった後でも、帰りが遅くなれば両親が心配します」

希美の言葉に、残りの二人は気まずそうな顔をした。

どうやら、二人はその事を考えずに返事をした様である。

そんな三人とは裏腹に、少女は大声で笑い出した。

「心配するでない。そこは我がどうとでも出来る範囲じゃ」

笑いながらそう言う少女に、希美もどうやら安心した様だ。

「……それでは、気兼ねなくやらせて頂きます」

そう微笑んだ希美の遥か後方で、『何か』が目を光らせていた事には、誰も気付かなかった。

深い闇に包まれた森の奥では、空間に虹色の裂け目が現れ、同時に何かの影が飛び出した。

その影はしばらく森の中を駆け抜けている内に、段々と人の形を見せていく。次の一瞬で、影は人間の姿になった。

漆黒の衣を纏う者は、まっすぐに森の中を進んで行った。

その内、大きな広場に出ると、漆黒の者は呪文を詠唱した。

長い呪文を唱えていると、広場になっっている空間が歪み始めていた。

歪みが完全に消えると、その広場には闇のロープを纏った者達が三日月を描く様に立っていた。

「フィアルグ様…『外』の様子はどうでしたか？」

一番近くに立っていた、闇色の髪を背中まで伸ばした女性が漆黒の者　フィアルグ　に問うた。

「…『壁』を保つ為に人間界に転生した筈の戦士が現れた」
フィアルグの一言でその場は騒然とした。

「三百年前の伝説が甦るのか……」

「あれだけは避けたいと思っていたのに……」

口々に言う者達の顔は、皆　同じ様に焦っていた。

「ちよつと止めなさいよ！」

「だがフユイレン、これでは我々の計画が駄目になってしまう」
「…キュラーまで………」

フユイレンと呼ばれた先程の女性は、騒ぎを静めようと一喝したが、キュラーという男性の困った様子で一気にしゅんと萎れる。

フィアルグが口を開く。

「現れた戦士達は十六、七の子供だ。伝説など成就しない」
不敵に笑う彼に、どうやら周囲の者も安心した様だ。

しかし、フィアルグは厳しい表情を見せたまま言い放った。

「だが、“　念には念を　” というからな……ソルヴィル」
「はっ！」

ソルヴィルと呼ばれた女性は、一礼した途端ふつと消えた。

フィアルグは踵を返しながら呟いた。

「『壁』はこの手で消してみせる　必ず」

No.2 Origin（後書き）

ああ……またもやごめんなさい！！！！

また二ヶ月掛かっちゃいました……」

中間試験や実力試験に期末試験、

一ヶ月試験やってたと言っても

過言ではないくらいでして……」」」

受験まであとわずか。入試が怖いです……（泣）

今回の話はどうでしたか？

楽しんで頂ければいいんですけど。

でも結局、懐中時計の正体分かりませんでしたね」

すみません……本当に行き当たりばったりなもので、

予定がずれてしまっんです。

今度は明らかにさせますから！！

次回は四人と謎の多い少女の元に、更に謎の深い
闇の男・フィアルグの刺客が襲撃します。

初戦で四人はどういう行動をとるのでしょうか。

乞うご期待を！！

「さて」

突然少女が口を開く。四人（内一人は石化したままだ）が振り向くと、

少女は複雑な表情をしていて動かない。

「まずはその眠りこけておる魔力をどうにかせねばな」

やっと口を開いた途端、彼女は妙な事を言う。

「魔力……？」

思わず囁喜が聞き返すと、少女は頷いて杖を構えた。

「時の大地よ、守人の鍵を渡し十字界の扉を開け。扉の奥で眠りについた

彼の者達のかつての力よ、その目を覚まし、導く者を与えたまえ」
少女が唱えると、杖についている大きな宝石が光り始め、そこから強い

風が四人に吹きつけた。

風に当たった途端、勇揮の石化が解けた。宝石から、四人に向かつて

それぞれに違う色の光が飛び出した。愛架には桃色、勇揮は群青、希美に黄緑、囁喜には橙色の光が。

四者四様でその光を掴むと、光は反応するように収まり、ある形を見せた。

「…鍵、ですか？これ……」

愛架がしげしげと見つめている。少女は構えていた杖を降ろすと、
「お主達の力は覚醒しておらん上に安定しておらぬ。その鍵は、
いわばコントロールするための物じゃ。雑に扱うでないぞ」

と言いながら、既に群青色の鍵を捨てようとしている勇揮に目を向けた。

「この妙ちくりんな鍵が何の役に立つって なんだよ」

言われてしまい何も出来なくなってしまった勇揮は、不機嫌な顔でぶつきらばうに少女へ問い掛ける。少女は片手で杖を持ち上げる。……あんな大きくて重そうなものを、どうして片手でひょいっと持ち上げる

事が出来るのだろうか。

「懐中時計を持っておるであろう。それぞれの時計に手で触れたままで、

鍵を天にかざすがいい」

四人は少女に言われた通り、それぞれ懐中時計に触れ、杖から現れた鍵を

太陽の照る空へかざす。

すると、自然と彼女達は呪文を詠唱していた。

「天と海と大地より守護を受けし者よ、我らの声に耳を傾けたまえ」

「炎と風と光の導きにより、星と太陽と闇の精霊に我らの意志を伝えよ」

「我らに眠るる秘めたる力の解放とともに大精霊の守護を授けたまえ」

「永き眠りに生きる者よ、今こそ眠りを解き放ち我らに彼の力を与えん」

「汝ら四戦士ここに認めんとする事を今ここに誓約する」

最後に少女が唱えた途端、シュツという音とともに、四人の鍵は一瞬光を帯びて変化した。

愛架の両手にあつた鍵は細長いステッキだ。頂には少し大きめの十字架が

掲げてある。自分の背とあまり変わらないそれを、愛架は慌てて掴んだ。

先ほど勇揮が捨てようとした鍵は長剣。竹刀より少しだけ重い剣を鞘から抜いてみると、うつすらと青い閃光が走る。

希美が大切そうに握っていた黄緑の鍵は弓矢へ変わった。弦の張つてある

部分は羽のモチーフが飾られており、その背にはいつの間にか矢筒も矢もある。

右手に乗っていた囃喜の鍵は双刀。片方の柄の先端に、丸いオブジェがあり、

もう片方の柄には、それを反転させた様なオブジェがついていた。

「…お主達の前世の力むかしが眠りから覚め始めたのであるう」

そう言われた四人だが、いまいち実感が沸かない。少女が苦笑して、「仕方あるまい。完全に覚醒するまではかなり時間がかかる。それまでは

何なのか分からんだろうな」

と言い、両手で横向きに持ち、杖を構え直す。

「…さて、今度は魔法を教えねばな」

言うが早いか、勇揮と囃喜に風の渦が纏いつく。途端、二人は眠気を感じて

目を閉じた。

「勇揮さん!!」

「祠堂さん!？」

愛架と希美が叫ぶが、動く事が出来ない。

二人の姿が渦で完全に見えなくなると、少女は少し低い声で言い始めた。

「、古より四大精霊と大精霊の守護を共に受けし者よ、

永きに渡る契約を再び交わし、各々の聖なる象徴の力を今授からん、」

そう言うが早いか、少女の杖の宝石から青と橙色の光がそれぞれの渦に射し込む。

渦が光の色に染まると、ゆっくりと消えていった。
勇揮と囁喜の目が開かれると、同時に愛架と希美を拘束した何かも消える。

「…では、次は汝らじゃな」
少女がそう言いながらも一度杖を横向きに構えた、その時。

「そうはさせませんよ」

突然響いたその声に、四人は辺りを見回す。ただ、少女だけは杖を構え直して固く目を閉じていた。

「…本当に子供なんですね。これで私達の相手がちゃんと出来るんですか？」

まどうけんじや
「魔導賢者さん」

「その声は……お主、ソルヴィルじゃな!？」

「ご名答です」

聞こえて来た方向に向く五人。

そこには、ロープをはじめ黒を基調とする服を纏ったショー
トカットの

女性が、腕組みをしたまま宙に浮いていた。

「おいおいおい!今度は何なんだよ!？」

勇揮が少女に向かって言うと、少女は緊迫した面持ちで返した。

「……世界の間の『壁』を壊そうと目論んでおる過激派の者じゃ」

少女の言葉に三人は息を飲む。だが、愛架だけは、

「では、あの方は完璧に敵方ですね」

などと呑気に言っている。希美は顔を空色に染めていて今にも倒れ
そうだ。

そんな中、少女の両隣にいる勇揮と囁喜は硬い顔をしたままで、
武器を構えている。

「サキ、ユウキ。今のお主達ではまだ無理じゃ」

その言葉に二人ははっと少女を見る。少女は杖を掲げて唱える。

「、光の鎖よ、彼の者達に進むべき道を示せ!」

少女が杖を振るうと、一本の樹木が白く光り始め、四人を絡め取ると
上に持ち上げていく。

「ま、待って!!私達、まだ…貴方の名前を聞いてないわ!!」

囁喜の言葉にきよんとする少女だが、数秒後にふんわりと笑った。
「我が名はスイルフじゃ。魔導賢者スイルフという。…さあ、もう行くがよい。まずは導師フュリアラに会ってじっくりと話を聞く事じゃ」

そう言いながらスイルフがゆっくりと杖を掲げると、光る樹木は巨大な鳥へと
その姿を変え、四人を乗せて一気に飛び去っていった。

「スイルフ　っ!!」

「てめえ死んだらただじゃおかね　からな　!!」

「…どうかご無事でいて下さい!!」

こんな声が小さく聞こえると同時に、四人は空から消えてしまった。

「相変わらずですね、貴方は。どうも他人に甘い所がある」

そう言つてクスクスと笑うソルヴィルに、スイルフは警戒を解く事なく言い放った。

「十年前助けた時は誠実で可愛らしい娘だったというのに、恩を仇で返しおつてのう……ソルヴィル」

「お褒めに預かり光栄にございます」

スイルフの皮肉に笑顔で答えるソルヴィルの両手に、突然糸が絡まつて来る。

その様子に、スイルフは驚きの表情を隠せない。

「糸…!!?お主っ!!まさか…あの法術を独学で会得したのか!？」

「独学なんかじゃありませんよ?基礎を少しばかり教えて頂きました」

言葉も出せず驚いているスイルフを尻目に、ソルヴィルの両手には糸がどんどん

集まつて来る。

全ての指に糸が掛かると、ソルヴィルは微笑を浮かべ、一言。

「…では、始めましょうか」

刹那、スイルフの後方の木から何かが迫って来た。

「、界、！！」

杖を地に突き立てて叫ぶ様に唱えると、後方の木から迫る『何か』を薄い膜が弾く。パシンという乾いた音が響いた。

「結界ですか……でも、それだけではこの法術は回避出来ませんよ」

そう言いながら腕を振り回すソルヴィル。その動きに糸が連動する。そして、パアンという音とともに、スイルフの身を守っていた

薄い膜 結界が弾ける様に消え失せていった。

「……やはりお主、術の素質があつたのじゃな。十年前、『狩人』に襲われた

お主を救った時にそう感じたが、間違いではなかったな……」

「しかし」

「……その力、その法術は、この数多の世界を守る為にこそ相応しいものじゃ。

己が存ずる世界をわざわざ壊す為に用いる様なものでは決してないぞ……！

ルーインさえ生きていればこの様な事、全くないというのに……」

「死んだ伯母の事など関係ありません。既に過ぎた事です」

スイルフの言葉が癪に障ったのか、ソルヴィルは一気に両手を振り下ろす。

恐ろしいスピードで、糸がスイルフに降り掛かった。

スイルフは杖で難なく糸を振り払う。

だが、ソルヴィルはこの行動を見越していたらしい。払われた糸を、

まるであやとりの様に操っている。

最後に勢いよく両手を広げると、糸はスイルフに巻きついて後ろの大木に

縛り付けた。その時の衝撃で、スイルフは杖を落としてしまう。

ぎりぎりとしが身体に食い込む。きつく締め上げられ、スイルフは思わず

うめき声をあげる。

「しばらくはそうして下さい。じきに誰か来るでしょう」

いつの間にか、ソルヴィルがスイルフの前に立っている。

彼女の両手にはもう糸はなかった。糸の両端は別々の木に巻きつけられている。

「では、…ごきげんよう」

笑顔でそう言うと、ソルヴィルはふわりと宙を翔けて行った。

「…戦士達よ…お主達は『記憶^{かこ}』を取り戻さぬ限り完全に

覚醒する事は叶わぬ…だが、覚醒しなければあの者どもに打ち勝つ事も

ままならぬのじゃ…『記憶』を思い出して世界を救うてくれ……

(フュリアラよ、ツルギとサキ達を頼むぞ……)」

ソルヴィルの糸に対抗しながらも、スイルフは空を見上げ願っていた。

その頃、囁き達は鳥の背に乗ったまま、スイルフの安否を気にしていた。

「スイルフ……私、やっぱり心配だわ！」

すつくと囁喜が立ち上がる。鳥の首に腕を回し、

「ねえお願い！私達をスイルフの所へ戻して！！」

「……戻るのはだめです」

叫ぶ囁喜に、希美が鋭く言い放つ。その言葉に、三人が彼女の顔を見る。

「スイルフさん、さっき別れる前に言っていましたよね？まずは『導師フユリアラ』」

さんに会ってじっくりと話を聞け、って。きっとスイルフさんは、私達に

その人の所へ早く行って欲しかったんですよ。という事は、今の世界は

それだけ状況は好ましくないという事になります。もしここで私達がさっきの

場所へ戻ったら、彼女の本当の望みを潰してしまうんです。……だから……

私達があそこへ戻る事は許されません」

凜として言う希美に、囁喜は黙り込んだ。その横で、

「あのヤローだから大丈夫だろ。やたらと長生きしてんだし」

あんだけ力使えんなら心配なんざいらねえよ、とあぐらを掻きながら言う勇揮の

視界に、先程会った女性　ソルヴィルが映った。

「……テメエ！！あのチビはどうした！！」

素早く立ち上がると、勇揮は長剣を構える。他の三人も、勇揮に続いてそれぞれの

武器を構えた。

「あの人はしばらく動く事が出来ません。何しろ少し悪戯が過ぎましたので」

そう言いながらクスクスと笑うソルヴィルの目は全く笑っていないか

った。

彼女の様子に、希美は再び自らの顔を青くした。

「そんなんでビビってんじゃねえ　よ希美」

突然耳打ちされ、希美ははっとしたまま左を見ようとした。しかし、勇揮の

手によってそれを止められる。

「お前と愛架は後ろから援護しろ。頼むな」

そう言くと、勇揮は囁きを呼び引き寄せて小声で話す。

「あの時の状況だと、魔法とやらを使えるのは俺と囁きだけだ。俺達は前に

立ってあの女に仕掛けるぞ。愛架と希美には後ろから援護を頼んである。

合図出したら始めるぞ。いいな」

四人が鳥の上で落ちない様に移動し始めた事に、ソルヴィルは首を傾げた。

「何の真似でしょうか皆さん？抵抗しても無駄ですよ」

「はっ！そりややってみなけりや分かんねーぜ？行くぞ！！」

勇揮の言葉が合図になり、希美は弓を構え相手に向かって一度に三本の矢を放つ。

それぞれが違う方向へ飛んだ為に、彼女はどの方向へも避けられず、左肩と

右足に傷を負った。

「へえ…なかなかやるじゃね　か！ただの怖がりで恥ずかしがりと思っただが

飛んだ間違いだぜ」

ヒュウという高らかな口笛とともに、勇揮は二カッと笑いながら希美に言った。

「……家が弓道の道場を継いでまして、私も小さい頃から教わっていたんです」

希美は勇揮のからかいに乗らず、しれっと返した。その様子に、勇

揮は少し驚いた。

…どうやら、希美は弓を持つと性格が少し変わる様である。

一方、愛架は杖を祈る様に持ってブツブツと何か呟いていた。自身でも驚くほど

すらすらと早口で唱え、両手が勝手に動いていた。

「囁きさん！」

その一言をきっかけにして、囁きは素早く双剣を片手に持ち、前に出した片手を広げて構えた。

深呼吸したこの一瞬後、囁きは人生で初めて魔法の呪文を唱えた。

「デイ・アプレイス・オーグスト！！（大地の精よ、無数の矢となつて敵を射て！！）」

詠唱が終わった瞬間、遙か下方から何本もの矢がソルヴィルを襲った。

「…っ！？」

間髪入れず襲撃する矢を避ける事も出来ず、数本が彼女を貫いた。

だが、途中で突然彼女の周りに薄い何かが現れ、たくさんの矢が弾かれて消えた。

「… 結界ですか」

「… ええ、その通りです」

ポツリと呟いた希美に、ソルヴィルは痛みに顔を歪めながらも笑って答える。彼女から

滴り落ちていく血は、希美の呼ぶ『結界』の中にわずかにたまっていった。

「予想外ですよ、お嬢さん方…お名前を伺いたいですね」

「ハンツ！そんな怪我で言う事か？…まあいい。俺は金沢 勇揮だ」
指に糸を絡ませながら聞く彼女に、鼻で笑いながら勇揮は答えた。

「私は荻原 愛架と申します」

「わ、私は天谷 希美です」

「…私は囃喜。祠堂 囃喜よ。貴方…ソルヴィルとかいったかしら。まだ何か

やるつもりなの？この状況だと、どう動いても貴方は不利にしかならないと思うけど」

愛架と希美は少々慌て気味だが、勇揮と囃喜は落ち着いたままである。

「…なるほど。『イーミットム・レジェンド（懐中時計）』を持つとここまで変わるんですか。」

これは少し気を付けなければなりませんね」

それでは一度出直して来ます、と言うと、ソルヴィルの両手に絡まっていた糸が

彼女を包み込んだ。

「逃がすかよっ…！」

そう叫ぶと、勇揮は長剣を横向きに構えた。

「グウィールス・ヴァン・アフレート！！（水の精よ、龍の姿を借り標的を捕えよ…！）」

呪文を唱えると、構えた長剣から龍を形取った水が現れ、切っ先をソルヴィルに向けると

水は剣から離れて彼女を取り囲もうとした。

だが、一足遅く、既にソルヴィルは下半身が消えた状態だった。

「次に会うのを楽しみにしてますよ。アイカさん、ユウキさん、ノゾミさん。」

そして サキさんも」

その一言を言い終えた途端、完全にソルヴィルの姿が消えた。

…同時に、勇揮がかけた魔法も解いて。

「…ちくしょう!!」

あと一歩だったのに…!!!!」

拳を強く握りながら叫んだ勇揮の声は、広い空に響き渡っていた。

どうも、皆さん。

…相変わらずの蒼です。

先日滑り止めの入試を受けて来ました。

結果は少し先になるという、受験も佳境に入って来たこの時期に投稿してます。…ちょっと大丈夫かなあ…」

さて、今回のストーリー！

手がかりになりそうな物が結構出て来ましたね。

懐中時計の正式な名称もここでやっと出せました。

…また内容は持ち越しですけど…」

どんどん先延ばしになってるなあ……（汗）

今回は導師フュリアらが、皆さん（と四人）の疑問を解いてくれると思います。

『イーミットム・レジエンド』という名の由来は？

今回 ちらつと出た『ツルギ』は何？？

答えは次の話で明らかに！

どうぞご期待下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0308a/>

Time Legend

2010年10月21日21時04分発行